

女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連

礪波 朋子

問題と目的

近年、晩婚化が進み、第1子を出生したときの母親の平均年齢は2010年で29.9歳と、35年前の1975年と比較すると4.2歳遅くなっている（厚生労働省、2011）。一方で、結婚期間が妊娠期間より短い出生の嫡出第1子に占める割合は平成21年度で25%を上回っており、妊娠後の結婚の割合は、平成21年には「15～19歳」で8割、「20～24歳」で6割、「25～29歳」で2割、30歳以降で1割となっており、年齢層が若くなるほど高くなっているといえる（厚生労働省、2010）。

初めて子どもを持つ母親となる時期は、晩婚化により平均的には年齢が高くなっているが、婚姻前妊娠等で比較的若くして母親になる場合も増えてきており、かなりの広がりがあるといえる。そのため、子育てに取り組む環境もまた人それぞれである。しかし、初めての子育てにおいてどの年齢の母親にも共通している問題として、育児不安や育児ストレスが挙げられる。

特に、少子化等の影響もあり、自分の出産前に乳幼児と密接にふれあう体験が少なかった母親にとっては、初めての育児はとまどうことばかりだということは想像に難くない。

本研究では、この子育てに関わる問題として、出産するまでの子どもとの接触経験や子どもに対する関心や親和欲求に焦点を当て、その経験が子どもに関するイメージや態度にどのような影響を与えるかについて検討していきたい。

原田（2006）は、1980年代初頭に大阪で実施された子育て実態調査で、子どもの発達と親のかかわりとの関係について明らかになったことの一つとして、「出産以前の子どもとの接触経験や育児経験がある母親の子どもは発達が良い」という結果を挙げている。ここで、「出産以前の子どもとの接触経験や育児経験がある母親」とは、子どもができるまでに、「他の子どもを抱いたり遊んだりしたこと」および「他の子どもに食べさせたりおむつをかえたりしたこと」が「よくあっ

た」と答えた母親のことである。この質問に対して育児経験が「まったくない」と答えた母親は、1980年代初頭に実施された調査では40.7%であったが、2003年に実施された調査では54.5%と増加し、半数以上になっており、逆に「よくあった」と答える母親は22.1%から18.1%へと減少していたことが報告されている（原田、2006）。

また、2003年の調査では「自分の子どもをもつ前にイメージしていた育児と実際の育児とでは違いがありましたか」という質問に対し、「大いにあった」と回答した母親は、4か月児健診時点で30.8%で、子どもの月齢とともに少しずつ増加し、3歳児健診時点では38.5%となり、「なかった」と答えた母親は6～7人に1人に過ぎなかったことも報告されており、「イメージと現実の育児とのギャップ」は子どもの成長とともに増大することが示されている（原田、2006）。

さらに、イメージと現実の育児とのギャップが大きかった群では、「育児でいらいらすることが多い」と答えた母親が50.8%と約半数であり、ギャップがなかった群では9.4%と少なかった。逆に、イメージと現実の育児とのギャップが大きかった群では「育児でいらいらすることは多くない」と答えた母親は22.4%で、ギャップがなかった群では26.1%となっており、想像していた育児と現実とのギャップが大きいほど、育児でのいらいら感が強いことが明らかにされた（原田、2006）。また、育児のことで今まで心配なことがしょっちゅうあった、育児に自信がもてないと感じることがよくある、子育てを大変と感じる、と回答した母親には、イメージと現実の育児とのギャップが大きい人の割合が高く、ギャップのない人の割合が低いことも報告されている。これらの結果から、原田（2006）は現実の子育てが自分のイメージしていたものと大きく異なることが、育児に負担感を感じる原因のひとつになっていると指摘している。

以上のように、「イメージと現実の育児とのギャップ」は育児における母親の感情や育児そのものにきわめて大きな影響を与えることが指摘されており、その

ギャップを小さくすることが子ども虐待を防ぐためにも、子どもの育ちにも、親自身の成長にとっても非常に重要な課題であると考えられる。

この点については、さらに、イメージと現実の育児とのギャップが大いにあったという母親は、先に述べた「育児経験」が少なく、逆にギャップがなかったと回答した母親は「育児経験」が多いことも明らかになっている（原田、2006）。

従来、子育てに必要な「母性」は女性の天分あるいは本能としてとらえられてきた。しかし、この考え方には近年疑問が呈されるようになってきている。

大日向（2000）は、「母性神話」のひとつとして、女性の生殖能力はそのまま育児能力につながるとみなす考え方、「産む能力イコール育てる能力」説を挙げており、人々の意識の中には母性を本能だとする考え方が歴然と残っていると述べている。さらに、もうひとつの「母性神話」としてすべての母親がいつでも聖母のようにやさしさと慈愛に充ちているという「聖母説」があるとし、そのような母性愛賛美の裏で実際の母親達は子育てのつらさを声高に訴えることができないという問題を抱えていることも指摘している。一方で、ひそかに語られる子育てのつらさを訴えるせりふのひとつに、育児の現実と直面した時発する「こんなはずではなかった」という言葉があるという（大日向、2000）。この言葉はまさしく、子育てに実際に関わる前に抱いていたイメージと現実のギャップの大きさを示すものといえる。

原田（2006）が指摘しているように、母性は育つものであり、母親の持つ母性性が発揮されるためには、適切な環境が必要である。特に子育てにおいて母性が豊かに発揮されている母親の特徴として「少女・娘時代の子どもの接触経験や育児経験が多かった母親」「自分自身の子どもの育児経験のある母親（第2子以上を育てている母親）」「夫が育児に参加・協力する母親」が挙げられており、最初の2つの特徴は、母性は育つものであることを示しているといえる（原田、2006）。

母性そのものではないが非常に関連性の強い概念のひとつとして「養護性」が挙げられる。「養護性」とは、小嶋（1989）が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義するものである。養護性については、親のみでなく子どもにもみられるこ

とも指摘されている。また、青年期以後の養護性については、棚澤・福本・岩立（2009）が、大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性へ及ぼす影響について検討している。その結果、「弟妹への養護体験」の高い群は低い群に比べて養護性の下位尺度である「共感性」「技能」得点が有意に高いことが明らかにされている。また、過去の体験は男子においては養護性形成にあまり影響を与えていなかったが、女子においては過去の被養護・養護体験が現在の養護性形成に強い影響を与えていることも示されている。

1980年代の調査では、出産以前の「子どもとの接触経験」や「育児経験」の多い母親ほど、具体的育児の状況が好ましく、精神的に安定し、育児を楽しめていること、そしてそのことが子どもの発達にも好ましい結果を与えていることが明らかにされている（原田、2006）。

さらに、中川・松村（2010）は、女子大学生の乳幼児への関わり方が乳児との接触経験により違いがみられるかを検討した結果、乳児に対するあやし行動が、接触経験有群の方が経験無群より行動レパートリー数が多く、乳児のぐずりも少なかったことを明らかにしている。

以上の研究から、子どもを産んだ母親が実際の子育てをどのように感じるかということは、出産前の子どもの接触経験や、出産前に抱いていた子どもや育児に対するイメージや母性の発達と関連していると考えられる。

看護や保育の分野では、学生が子ども達との接触経験によりどのように子どもに対するイメージを変容させていくかを調べた研究が数多く行われている。

岡田・中新・谷原（2006）は、医療保育科学生と看護科学生における入学時の子どものイメージを比較しており、医療保育科学生の方が看護科学生より子どもの良いイメージ得点が高いことを明らかにした。また子どもイメージの構造は両科の学生で差はないが、「性質に関するイメージ」「対子ども感情」の得点が医療保育科の方が看護科学生よりも高く、子どもの性質をより理想的、肯定的にとらえていることも明らかになった。子どもに積極的に関わりたいと考える人の方が、子どもに対して肯定的なイメージをもっていたといえる。

また、岡田（2006）は、医療保育学科学生の保育所

実習前後の子どもイメージの変化について検討し、実習前より実習後の方が子どもに対するイメージがより肯定的な方向へ変容したことを明らかにしている。この結果は、子どもとの接触経験がよりよい子どもイメージの形成に効果的であることを示している。

さらに、菅（2002）は、大学の教育学部教員養成課程に在籍する学生を対象に、専門教育が学生のもつ子どもイメージをどう変化させるかについて検討している。その結果、大学4年生の方が1年生よりも3歳児の「かわいらしさ」・「自立性」・「鋭敏性」や5歳児の「問題解決能力」について、幼児をより高く評価しており、教員養成に関わる教育を受けることで幼児のとらえ方がよりポジティブな方向に変化したことが明らかにになった。

これらの研究結果は、子どもに積極的に関わりたいという子どもに対する親和性が子どもの肯定的なイメージの形成に影響し、一方で子どもと密接に関わることが子どもに対するイメージを肯定的に変容させることを示唆しているといえる。

以上の研究で検討されてきた子どもに対するイメージは、子育てのイメージ（育児イメージ）にも関係すると考えられるが、育児イメージと等しいものではない。育児イメージにはさらに、子どもと関わる親の姿のイメージが含まれる。

この育児イメージについて、石松・江藤・山本（2004）は「親として子どもを育てることに対する感情と考え」と定義し、看護学科学生・保育学科学生・栄養学科学生の持つ育児イメージと対児感情（子どもに対する感情）について調査し、比較検討している。その結果、得られた育児イメージと対児感情との間に相関があり、保育学科生は他学科生と比べて子ども好きで子どもの世話の経験があるため育児イメージも対児感情得点とともに高いことを明らかにした。

また、西原・小林・遠藤・清水（2008）は、妊婦が抱く育児イメージについて第1子を育児中の母親と比較した研究を行っている。西原らの研究では育児イメージの測定に、育児幸福感尺度・育児ストレス尺度を使用している。その結果、第1子を妊娠中の妊婦は、育児の楽しさや喜びもイメージしているが、実際に育児中の母親より育児ストレスを強くイメージしていることが明らかになった。

育児イメージには肯定的なイメージと否定的なイ

メージとの両側面があり、子どもに対する感情や実際の子どもの関わりにより育児イメージが変化することが示唆されている。

以上の研究結果を総合すると、実際の子育ての不安やストレスに関連する要因のひとつとして、イメージと現実の育児のギャップが挙げられ、このギャップは子どもとの接触経験が多いほど少なくなると考えられる。また、子どもとの接触経験は、育児イメージや子どもイメージの形成に影響するだけでなく、母性や養護性の発達にも影響している。さらに、子どものことが好きで積極的に関わりたいという親和性の要因も、子どもイメージや育児イメージの形成に影響していると考えられる。

本研究では、子どもに関わる専門家養成という視点ではなく、より一般的に将来母親となり子育てに携わる可能性がある女子大学生を対象として、子どもとの接触経験や子どもに対する親和欲求及び養護性が、子どもイメージや育児イメージにどのような影響を与え、各要因間にどのような関連がみられるかを検討することを目的とする。

方 法

1. 質問紙 「1. フェースシート」「2. 子どものイメージ」「3. 乳幼児との接触経験」「4. 乳幼児への親和欲求」「5. 育児イメージ」「6. 養護性尺度」の6領域からなる質問紙を使用した。

第1のフェースシートでは、学年、性別、年齢、きょうだいに関する情報、身近にいる乳幼児に関する情報、保育実習体験について質問した。

第2の子どものイメージでは、井上・小林（1998）が子ども観の測定に有効であるとした形容対25項目、野村・河上・長谷・藤原（2007）が子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージの測定に使用した「行動特性」「好感度」「自律性」「情緒性」の4因子から構成される47項目、岡田・中新・谷原（2006）が使用した「活動的イメージ」「対子ども感情」「性質に関するイメージ」の3因子からなる29項目から、重複する項目を中心に20項目を使用した。

第3の乳幼児との接触経験では、佐藤（2004）と野村ら（2007）を参考に乳幼児の世話をした体験（「抱っこをする」「おむつを交換する」「お風呂に入れる」「泣

いている子どもを寝かせつける」「遊び相手をする」など) 10 項目を用いた。回答は、「かなり経験がある」と「全く経験がない」を両極とする 4 段階評定を使用した。

第 4 の乳幼児への親和欲求では、野村ら (2007) で使用した「赤ちゃんや幼児が好き」「触れたい」「遊びたい」「守りたい」の項目に、新たに「世話をしたい」という項目を加えた 5 項目で、回答は「あてはまる」と「あてはまらない」を両極とする 5 段階評定を使用した。

第 5 の育児イメージでは、石松・江藤・山本 (2004) が看護学科・保育学科・栄養学科の学生を対象にした調査の自由回答で得られた育児イメージを参考に「幸せな」「やりがいのある」などプラスイメージ 8 項目、「束縛される」「大変な」などマイナスイメージ 8 項目の 16 項目を用い、回答は「あてはまる」と「あてはまらない」を両極とする 5 段階評定を使用した。

第 6 の養護性尺度では、棚澤・福本・岩立 (2009) が作成した養護性尺度 25 項目を使用した。回答は、「全くあてはまらない」「とてもよくあてはまる」を両極とする 6 段階評定を用いた。

2. 調査対象・時期・回収率 京都市の私立女子大学に通う女子大学生 103 名を対して 2011 年 6 月下旬から 7 月上旬にかけて調査を実施した。回収率は 93% で、有効回答数は 96 であった。

結 果

1. 各得点の算出

(1) 子どもイメージ

乳幼児のイメージ 20 項目の平均値、標準偏差を算出した。天井効果の見られた 1 項目を以降の分析から除外した。次に残りの 19 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 3.83, 2.45, 2.20, 1.58, 1.18… というものであり、4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 4 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 3 項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンを Table1 に示す。なお、回転前の 4 因子で 16 項目の全分散を説明する割合は 58.20% であった。

第 1 因子は、「きちんとした」「思いやりのある」「頼もしい」「責任感のある」の 4 項目で構成されており、「自律性」因子と命名した。第 2 因子は「にぎやかな」「意欲的な」「明るい」「落ち着きのない」「はげしい」の 5 項目で構成されており「活動性」因子と命名した。第 3 因子は「愉快的な」「優しい」「好きな」「良い」の 4 項目で構成されており「好感度」因子と命名した。第 4 因子は「強気な」「たくましい」「こわい」の 3 項

Table 1 子どもイメージの因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

因子名	質問項目	I	II	III	IV
I 自律性	きちんとした - だらしない	.76	.13	.00	-.25
	思いやりのある - わがままな	.61	-.21	-.06	-.04
	頼もしい - 頼りない	.60	.10	-.09	.18
	責任感のある - 無責任な	.57	-.14	.01	.11
II 活動性	にぎやかな - 静かな	-.21	.69	-.03	.02
	意欲的な - 無気力な	.23	.68	-.06	.14
	明るい - 暗い	.14	.57	.28	.01
	落ち着きのない - 落ち着いた	-.20	.53	-.22	-.09
	はげしい - おだやかな	-.30	.45	-.03	-.03
III 好感度	愉快的な - 不愉快的な	-.08	.04	.78	.10
	優しい - 厳しい	-.15	-.22	.64	.01
	好きな - 嫌いな	-.04	.09	.62	-.10
	良い - 悪い	.12	-.05	.47	-.03
IV 強靱性	強気な - 弱気な	-.10	.13	.07	.77
	たくましい - 弱々しい	.33	.05	.05	.52
	こわい - やさしい	-.12	-.14	-.30	.49

目で構成されており「強靱性」因子と命名した。

子どもイメージの4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「自律性」得点（平均 2.89, SD 0.85）, 「活動性」得点（平均 5.48, SD 0.74）, 「好感度」得点（平均 5.32, SD 0.85）, 「強靱性」得点（平均 3.77, SD 0.96）とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「自律性」で $\alpha = .73$, 「活動性」で $\alpha = .72$, 「好感度」で $\alpha = .69$ で十分な内的一貫性が確認された。ただし、「強靱性」では $\alpha = .56$ で内的一貫性が高いとはいえないが、下位尺度項目の安定性を考慮し、この3項目で構成することとした。

(2) 乳幼児との接触経験

乳幼児との接触経験について、「おもむ交換をする」「トイレの世話をする」「ミルクを飲ませる」「お風呂に入れる」の4項目を「身の世話」経験, 「衣服を着替えさせる」「子どもを寝かしつける」「半日以上一人で世話をする」の3項目を「日常的な世話」経験, 「遊び相手をする」「抱っこをする」「泣いている子どもをなだめる」の3項目を「子守り」経験として分類した。各カテゴリーに相当する項目の平均値を算出し、「身の世話」得点（平均 1.77, SD 0.90）, 「日常的な世話」得点（平均 2.10, SD 1.01）, 「子守り」得点（平均 2.95, SD 0.77）とした。

内的整合性を検討するために各カテゴリーの α 係数を算出したところ、「身の世話」で $\alpha = .92$, 「日常的な世話」で $\alpha = .89$, 「子守り」で $\alpha = .85$ と十分な値が得られた。

(3) 乳幼児への親和欲求

乳幼児への親和欲求について、「好き」を除き、積極的に乳幼児に関わりたい意志を示す「触れたい」「遊びたい」「守りたい」「世話をしたい」の4項目の得点の平均点を、親和欲求得点とした（平均 3.98, SD 1.02）。

(4) 育児イメージ

育児イメージ16項目について、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化は、5.81, 2.57, 1.28…というものであり、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターン

と因子間相関を Table2 に示す。なお、回転前の2因子で13項目の全分散を説明する割合は 59.81%であった。第1因子は「育児肯定的イメージ」、第2因子は「育児否定的イメージ」と命名した。

「育児肯定的イメージ」, 「育児否定的イメージ」に相当する項目の平均値を算出し、「育児肯定的イメージ」得点（平均 4.21, SD 0.72）, 「育児否定的イメージ」得点（平均 3.75, SD 0.63）とした。育児イメージの各因子の信頼性係数（Cronbach の α 係数）は、それぞれ「育児肯定的イメージ」 $\alpha = .93$, 「育児否定的イメージ」 $\alpha = .67$ で、「育児肯定的イメージ」では十分に高い内的整合性があったといえる。「育児否定的イメージ」では α 係数は多少低い、おおむね信頼できると考えられるため、この得点を用いる。

(5) 養護性

養護性尺度の33項目について主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化は、10.70, 3.09, 1.67, 1.21…というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった5項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table3 に示す。なお、回転前の3因子で28項目の全分散を説明する割合は 68.56%であった。棚澤・福本・岩立（2009）と同様に、第1因子は幼い子どもに対する共感や関心を示す程度

Table 2 育児イメージの因子分析結果
(Promax 回転後の因子パターン)

因子名	質問項目	I	II
I 肯定的 イメ ージ	嬉しい	.86	-.10
	幸せな	.83	.03
	心が癒される	.82	-.07
	やりがいがある	.79	.21
	大切な	.77	.29
	愛情にあふれた	.73	-.04
	楽しい	.69	-.21
	自分の成長になる	.59	.03
II 否定的 イメ ージ	大変な	.27	.66
	束縛される	-.04	.61
	いらいらする	-.40	.53
	不安な	.16	.52
	面倒な	-.32	.45

であり「幼い子どもに対する共感性」因子（以下、「共感性」）と、第2因子は子どもに対するスキルの自信を示す程度であり「幼い子どもに対する技能の認知」因子（以下、「技能」）と、第3因子は将来的に親になって子どもを育てようと考えていることを示しており「親への準備性」因子（以下、「準備性」）と命名した。糊澤ら（2009）の調査で第4因子として命名された「子どもの非受容性」因子は本研究ではみられなかった。

養護性尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「共感性」得点（平均 4.00, *SD* 0.85）,「技能」得点（平均 2.91, *SD* 0.86）,「準備性」得点（平均 3.60, *SD* 0.95）とした。養護性尺度の各因子の信頼性係数（Cronbach の α 係数）は、それぞれ「共感性」 $\alpha = .92$,「技能」 $\alpha = .92$,「準備性」 $\alpha = .77$ で、第1因子から第3因子まで十分な値が得られた。養護性の下位尺度間相関を Table3 に示す。3つの下位尺

度は互いに有意な正の相関を示していた。

2. 年の離れた弟妹・身近な子ども・保育実習経験の有無による各得点の差

5歳以上年の離れた弟妹の有無, 3歳以下の身近な子どもの存在の有無, 保育実習経験の有無により, 親和欲求, 接触経験, 子どもイメージ, 育児イメージ, 及び養護性得点に差が見られるかを検討するため独立の t 検定を行った。結果を Table4 に示す。（以下, t 値などは Table4 に示して本文では統計数字を省略する。）

(1) 年の離れた弟妹の有無

5歳以上年の離れた弟妹がいる群の方がいない群よりも,「身の世話」「日常的世話」経験と,養護性「共感性」が有意に高かった。年の離れた弟や妹がいる群では, 弟妹の養育の手伝いをする事が多く, 子ども

Table 3 養育性尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

因子名	質問項目	I	II	III
I 共感性	小さい子どもを見ると自分も笑顔になっている	.88	.03	-.07
	子どもが不安そうな顔をしているときは, 不安を取り除いてあげたい	.86	.05	-.09
	幼い子どもはあまり好きになれない (逆転)	.83	-.13	.03
	子どもが遊んでいるのを見ていと楽しくなる	.78	-.09	.04
	幼児の姿をみかけるとつい目で追ってしまう	.75	.09	.01
	幼い子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う	.74	-.04	.06
	小さい子どもを見ても別にかわいいと感じない (逆転)	.72	-.09	.11
	子どもが好きなほうだと思う	.58	.31	.15
	幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.54	.21	.13
II 技能	幼い子どもの世話には自信がある	-.14	.89	.14
	大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる	.12	.84	-.29
	赤ん坊をあやすのがうまいと思う	-.06	.81	.01
	幼児の遊び相手になる自信はない (逆転)	.18	.77	-.15
	幼い子どもがぐずっている時, うまくなだめることができる	-.11	.72	.28
	今すぐにでも幼稚園の教師をやっていけそうな気がする	-.22	.67	.27
	幼い子どもの話し相手になれると思う	.37	.62	-.11
III 準備性	幼い子どもをあきさせないで 30 分以上遊ばせることができる	.01	.58	.06
	自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする	.10	-.01	.81
	将来, 子どもをうまく育てらると思う	-.05	.18	.74
	自分は子どもを育て, よい親になろうと思っている	.43	-.18	.53
因子間相関				
		I	II	III
I		1.00	.50	.54
II			1.00	.42
III				1.00

Table 4 年の離れた姉妹・身近な子ども・保育実習経験の有無による各種得点の差

	年の離れた姉妹			身近な3歳以下の子ども			保育実習経験		
	有	無	t 値	有	無	t 値	有	無	t 値
親和欲求	4.42 (0.71)	3.89 (1.05)	1.96 [†]	4.26 (0.87)	3.82 (1.07)	2.08 [*]	4.05 (1.08)	3.88 (0.94)	0.76
接触経験	2.22 (1.06)	1.68 (0.85)	2.21 [*]	1.93 (0.85)	1.69 (0.93)	1.25	1.90 (1.03)	1.59 (0.68)	1.79 [†]
	2.56 (1.02)	2.01 (0.99)	2.04 [*]	2.33 (0.94)	1.97 (1.03)	1.69 [†]	2.35 (1.02)	1.77 (0.91)	2.86 ^{**}
	3.19 (2.91)	2.90 (0.77)	1.34	3.21 (0.66)	2.82 (0.79)	2.44 [*]	3.12 (0.73)	2.73 (0.76)	2.54 [*]
子どもイメージ	2.78 (1.04)	2.91 (0.81)	-0.51	3.03 (0.82)	2.82 (0.86)	1.16	2.89 (0.90)	2.90 (0.78)	-0.10
	5.54 (0.78)	5.47 (0.74)	0.34	5.48 (0.64)	5.48 (0.79)	0.03	5.43 (0.74)	5.55 (0.74)	-0.77
	5.55 (0.99)	5.27 (0.81)	1.18	5.44 (0.84)	5.25 (0.85)	1.05	5.27 (0.77)	5.39 (0.94)	-0.66
	4.00 (1.18)	3.73 (0.91)	1.04	3.53 (0.91)	3.91 (0.97)	-1.86	3.86 (0.88)	3.65 (1.06)	1.05
育児イメージ	4.23 (0.97)	4.20 (0.67)	0.16	4.31 (0.57)	4.16 (0.79)	0.97	4.29 (0.58)	4.10 (0.87)	1.22
	3.64 (0.50)	3.77 (0.65)	-0.77	3.55 (0.62)	3.85 (0.61)	-2.30 [*]	3.75 (0.56)	3.75 (0.72)	0.21
養護性	4.38 (0.52)	3.93 (0.88)	2.00 [*]	4.07 (0.74)	3.97 (0.90)	0.57	4.02 (0.91)	3.97 (0.77)	0.29
	3.23 (0.68)	2.85 (0.89)	1.54	3.15 (0.82)	2.79 (0.87)	1.94 [†]	3.08 (0.91)	2.69 (0.76)	2.17 [*]
	3.96 (0.82)	3.53 (0.96)	1.67 [†]	3.68 (0.96)	3.56 (0.95)	0.57	3.70 (0.97)	3.46 (0.91)	1.23
人数 (n)	16	80		34	62		55	41	

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

に対する共感や関心が高くなっていたといえる。

(2) 身近な子どもの存在の有無

身近に3歳までの子どもがいる群の方がいない群よりも、「親和欲求」や「子守り」経験が有意に高く、育児の「否定的イメージ」が有意に低かった。身近に幼い子どもがいる群では、子ども達に積極的に関わりたいという欲求が強く、遊び相手をするなどの子守り経験も多く、育児そのものに対する否定的なイメージをあまり抱かなかったと考えられる。

(3) 保育実習等の経験の有無

中学校・高校時代の保育実習の経験のある群の方がいない群よりも、「日常的世話」「子守り」経験及び、養護性「技能」が有意に高かった。保育実習の経験がある群では、子どもの世話をする機会が多く、子どもに対するスキルに自信を持っていたといえる。

3. 接触経験の高低による各得点の差

過去の子どもの接触経験について、平均点をカットポイントとして接触経験（身の世話・日常的世話・子守り）得点が低い群と高い群に分けた。

子どもとの接触経験の高低により、親和欲求、接触経験、子どもイメージ、育児イメージ、及び養護性得点に差が見られるかを検討するため独立の t 検定を行った。その結果をTable5に示す。（以下、 t 値などはTable5に示して本文では統計数字は省略する。）

(1) 身の世話経験の高低

「身の世話」経験の多い群の方が少ない群よりも、有意に子どもに対する「親和欲求」が高く、子どもイメージ「好感度」が高く、「強靱性」が低く、育児に対する「肯定的イメージ」が高く、「否定的イメージ」が低く、さらに養護性「共感性」及び「技能」が高かった。

食事・排泄・入浴などの世話をした経験がある群は、子どもに関わりたいという気持ちが強く、子どもに対して好意的なイメージを持ち、一方であまり強い存在であるとイメージは持っていなかったといえる。また、育児に対する良いイメージは強く、悪いイメージは弱く、子どもに対する関心や共感が高く、子どもに対するスキルにも自信を持っていたといえる。

(2) 日常的世話経験及び子守り経験の高低

「日常的世話」経験、「子守り」経験共に、高い群の方が低い群よりも、子どもに対する「親和欲求」、育

児に対する「肯定的イメージ」、及び養護性「共感性」「技能」が有意に高かった。

「日常的世話」、「子守り」経験は、「身の世話」に比べると比較的軽い関わりだといえる。これらの経験が高い群は、子どもに関わりたいという気持ちが強く、育児を肯定的にとらえ、子どもに対する共感性は高く、子どもに対するスキルに自信を持っていたといえる。

4. 接触経験・親和欲求・子どもイメージ・育児イメージ及び養護性の関連

さらに、各種接触経験が子どもイメージ・育児イメージにどのような影響を与えており、養護性・親和欲求とどのように関連しているかを検討するため、パス解析を行った。欠損値のあるデータを除き88名分のデータを対象に、Amos20を使用して分析を行った。各変数には下位尺度得点を投入した。まず、親和欲求と養護性「共感性」、「準備性」及び養護性の「共感性」と「準備性」との間に相関関係があったことから共分散を仮定した。接触経験「身の世話」「日常的世話」「子守り」間にも相関関係があったことから共分散を仮定した。

各種「接触経験」が「子どもイメージ」の下位尺度、育児の「肯定的イメージ」・「否定的イメージ」、「養護性」に影響を及ぼすこと、「親和欲求」が各種「接触経験」に影響を及ぼすこと、「養育性」が「子どもイメージ」、育児の「肯定的イメージ」・「否定的イメージ」に影響を及ぼすことを仮定して分析を行った。その結果、各種接触経験から子どもイメージ・育児イメージへのパス係数、親和性から接触経験へのパス係数及び各種接触経験と養護性のパス係数の多くが有意でなかったため、有意でなかったパスを削除し、関連が示唆されたパスを加え、再度分析を行った。モデルの解釈可能性と適合度検定の結果を検討し、Figure1 (GFI=.904, AGFI=.845, CFI=.963, RMSEA=.067)のモデルを採用した。標準化された因果係数、決定係数をFigure1に示す。

接触経験と子どもイメージ、育児イメージとの関係では、「身の世話」経験のみが子どものイメージの「強靱性」にそれほど高くはないが負の有意なパスを示しており、「強靱性」イメージは育児の肯定的イメージに低い値ではあるが有意な負のパスを示していた。また、養護性の「技能」は、「日常的世話」経験と「親

Table 5 各種接触経験の高低による各種得点の差

	身辺の世話			日常的世話			子守り		
	高	低	t 値	高	低	t 値	高	低	t 値
親和欲求	4.48 (0.72)	3.71 (1.06)	4.16***	4.27 (0.97)	3.71 (1.01)	2.81**	4.29 (0.91)	3.48 (1.01)	4.01***
子どもイメージ	2.89 (0.82)	2.90 (0.87)	-0.07	3.00 (0.82)	2.80 (0.87)	1.18	2.91 (0.86)	2.88 (0.84)	0.15
	5.36 (0.81)	5.54 (0.70)	-1.11	5.44 (0.74)	5.52 (0.75)	-0.51	5.46 (0.81)	5.50 (0.61)	-0.25
	5.62 (0.68)	5.16 (0.86)	2.84**	5.43 (0.75)	5.22 (0.92)	1.24	5.44 (0.75)	5.13 (0.95)	1.68†
	3.39 (0.79)	3.97 (0.99)	-2.90**	3.65 (0.94)	3.88 (0.98)	-1.18	3.75 (0.94)	3.81 (1.01)	-0.31
育児イメージ	4.41 (0.49)	4.11 (0.80)	2.26*	4.36 (0.57)	4.07 (0.82)	2.06*	4.33 (0.62)	4.02 (0.83)	2.09*
	3.84 (0.66)	3.84 (0.66)	-2.12*	3.70 (0.57)	3.79 (0.68)	-0.72	3.73 (0.66)	3.78 (0.58)	-0.38
養護性	4.37 (0.57)	3.81 (0.91)	3.67*	4.24 (0.62)	3.78 (0.97)	2.83**	4.22 (0.71)	3.64 (0.94)	3.42***
	3.51 (0.73)	2.61 (0.77)	5.43***	3.39 (0.78)	2.47 (0.69)	5.98***	3.17 (0.84)	2.50 (0.73)	3.89***
	3.86 (0.74)	3.47 (1.02)	1.96†	3.69 (0.92)	3.52 (0.97)	0.86	3.67 (1.01)	3.50 (0.86)	0.86
人数 (n)	33	63		46	50		59	37	

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

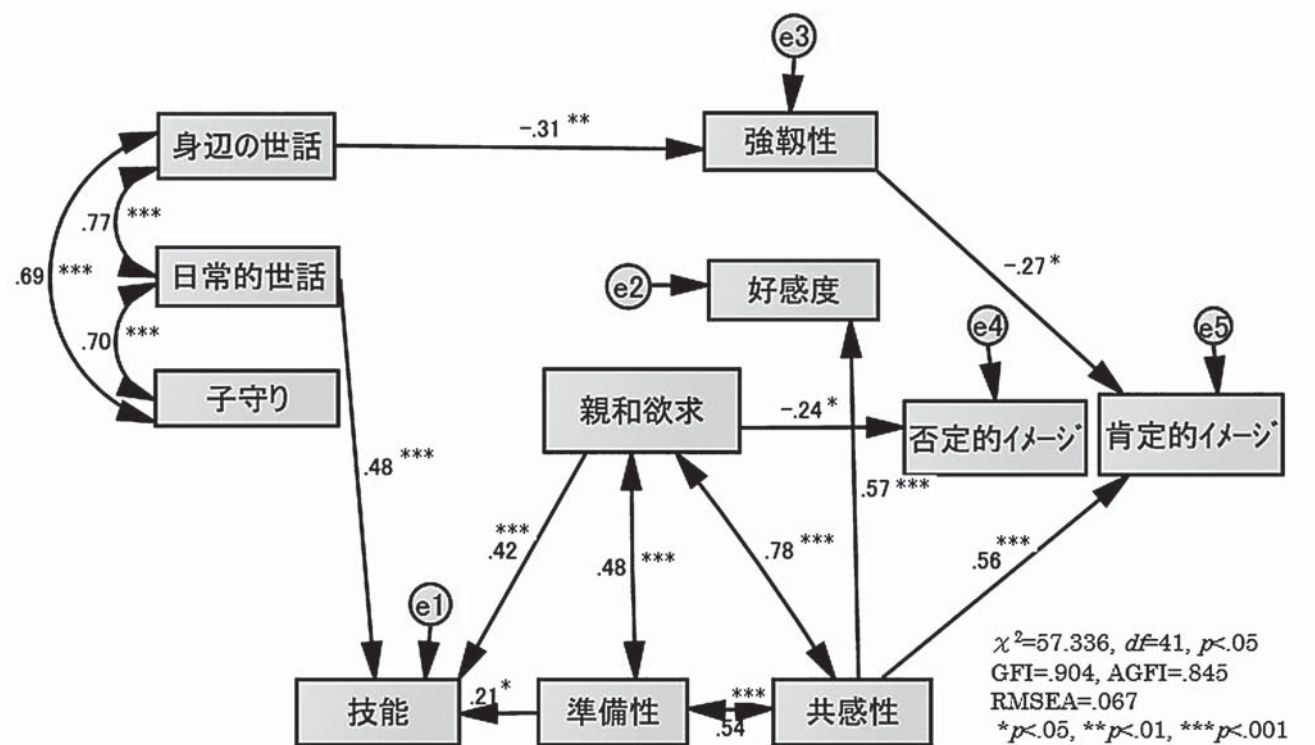


Figure 1 パス解析の結果

和欲求」から中程度の正の影響を受けており、養護性の「準備性」からも低いが正の影響を受けていた。「親和欲求」は、育児の「否定的イメージ」に比較的低い値であるが有意な負の影響を及ぼしていた。養護性の「共感性」は子どもイメージの「好感度」や育児の「肯定的イメージ」に大きな正の影響を与えていた。

考 察

1. 子どもに関わる機会と接触経験

本研究の結果、5歳以上離れた弟妹、身近な子ども、保育実習の経験の有無など、幼い子どもと関わる機会の有無は、子どもイメージには影響を与えず、主に接触経験に影響を与えていた。

年の離れた弟妹の存在は、大学生にとっては過去に幼い子どもと関わる機会があったことを示している。一方で、身近に3歳以下の子どもがいるかどうかについては、幼い子どもと現在関わる機会があることを示しているといえる。

過去の被養護・養護体験が現在の養護性へ及ぼす影響を検討した棚澤ら（2009）の研究では、女子大学生の場合、弟妹への養護体験が養護性の「共感性」に有

意傾向の影響を与えていることが示されていた。本研究で得られた、過去に幼い弟妹の面倒をみる機会があった学生は養護性の「共感性」が有意に高いという結果は棚澤ら（2009）の研究結果を支持するものであったといえる。

次に、「身近に3歳以下の子どもがいる」という現在の子どもの関わる機会がある学生は、親和欲求が高く、子守りの経験が多く、育児の否定的イメージが弱いことが示されていた。これは、幼い子どもの姿を日常的に目にするにより、子どもに関わりたいという欲求が高まり、一方で実際にその子どもの世話をする経験や、子どもとその子どもに関わる大人の姿を見る機会を通して、結果的に育児に対する否定的イメージが弱まっていたと考えられる。

年の離れた弟妹の有無では、育児イメージに差が見られなかったが、身近な3歳以下の子どもの存在の有無では、差がみられた。この結果から、過去の子どもの接触機会よりも、青年になってからの現在の子どもの接触機会の方が育児イメージの形成に影響を与える可能性が示唆された。

また、保育実習の経験は、子どもとの接触経験や、子どもに対するスキルである「技能」に影響を与えて

いたが、子どもに対するイメージや親和欲求などには影響していなかったといえる。

一方、本研究では、子ども達との各種の接触経験が多かった学生が少なかった学生よりも養護性「共感性」「技能」が有意に高かったという結果が得られた。これは、棚澤ら（2009）の「弟妹への養護体験が高い人ほど、「共感性」「技能」が有意に高かったという結果と一致するものである。

ここで、子どもと関わる機会の有無と、実際に子どもと関わった経験の有無との違いに焦点を当て、上述した結果について再度検討する。

過去（や現在）に子どもと関わる機会があった（もしくはある）学生となかった（もしくはない）学生との間で、養護性の一部にしか有意な差はみられなかった。一方で、実際に子どもとの接触経験が多かった群と少なかった群とでは、その接触タイプによらず、養護性の「共感性」及び「技能」について有意な差がみられた。つまり、当然のことともいえるが、子どもと関わる機会の有無よりも実際に接触経験があるかどうか養護性に影響しているということになる。

これは、原田（2006）が「子どもとの接触経験や育児経験が多い母親ほど母性が豊かである」という結果にはふたつの見方ができることを指摘していることと関連する。ひとつは、出産以前の子どもの接触経験は、母親の母性の豊かさのひとつの目安であるという見方である。もうひとつは、少女・娘時代の子どもの接触や具体的育児の体験が母親の母性の成長にとって大きな役割を果たしているという見方である。原田（2006）は、子どもが少なくなった現在、出産以前に子どもと接触する機会は少なくなっているため本人の努力ではなくチャンスに恵まれるかどうかの問題であり、そのようなチャンスをたまたま得られた母親は、母性が豊かであるということを示しており、「少女時代や娘時代の小さな子どもとの接触経験や育児経験は、母性を育てる」と結論してもいいのではないかと述べている。

本研究では母性の測定は行っていないが、養護性尺度の「共感性」が母性に非常に近い性質を持っていると考えられる。この「共感性」には、子どもと関わる機会の有無ではなく、実際に子どもと関わった経験により差がみられた。原田（2006）が指摘するように、子どもと関わる経験は子どもに対する共感や関心を高

めるといった側面がある一方で、子どもに関わりたいという親和欲求や、子どもに対する共感性の高さが、子どもと関わる機会を活かして実際に子どもと関わる経験につながっていた可能性が考えられる。

2. 子どもとの接触経験のタイプ

本研究では、実際に子どもとどのような関わりを持っていたかという経験が、子どもイメージ・育児イメージ・親和欲求・養護性など多様な側面に影響を与えることが示唆された。

特に、同じように幼い子どもと接したことがあるといっても、その中身が、食事・排泄・入浴など育児行動であるか、または寝かせ付ける・あやす・遊ぶといった比較的軽い内容の関わりであるかにより、子どもとの接触経験が与える影響が異なることも示された。中でも、育児行動を体験した人たちは、育児行動を体験していない人たちよりも、子どもに対する強靱性イメージが低く、つまり子どもは弱々しく、やさしく、弱気だとイメージしていたことは興味深い結果であった。この子どもに対するイメージは幼い子どもを保護する対象としてとらえることにつながる。また、育児を肯定的にとらえるイメージが強かった。

この関係は、パス解析で、接触経験が子どもイメージさらに育児イメージに影響を及ぼすことを示した唯一有意なパスであった。乳幼児の子どもの身体に直接ふれるような経験をすることにより、子どもの持つかよわさや頼りなさを実感し、その子どもの世話をすることが必然であり喜びを感じるように肯定的な育児イメージが形成されたと考えられる。

本研究の結果から、子どもイメージや育児イメージに影響を与えるのは、日常的な世話や子守りといった比較的軽度な関わりではなく、食事・排泄・入浴などの育児行動であることが示唆された。

3. 親和欲求、養護性と子どもイメージ、育児イメージとの関連

本研究で行ったパス解析の結果では、「接触経験」が「子どもイメージ」・「育児イメージ」に与える影響は限られており、むしろ「親和欲求」や養護性の「共感性」がイメージに影響を与えていることが示された。

子どもに関わりたいという「親和欲求」は、育児に関する「否定的イメージ」を弱めるように影響してい

た。また、養護性の「共感性」は、子どもイメージの「好感度」と育児の「肯定的イメージ」に大きな影響を及ぼしており、子どもに対する共感性が高いと子どもの好ましいイメージが強くなり、育児に対しても良いイメージが強くなるといえる。

また、ある要因が直接育児イメージや子どもイメージ全体に大きな影響を及ぼすといった単純な構造は見られず、複数の要因が少しずつ影響し合っているという構造がみられた。

4. まとめと今後の課題

本研究では、育児イメージの形成に関わる要因として子どもとの接触経験に焦点を当て、他の要因との関わりについて検討した。その結果、子どもとの接触経験の量が、育児の肯定的イメージや養護性に影響を与えていることが明らかになった。また、子どもとどういう関わりをしたのかによって、その影響は異なることも示された。

育児不安や育児ストレスを軽減するためには、イメージと現実の育児のギャップを小さくする必要があることが指摘されてきたが、本研究の結果から、育児イメージや子どもイメージに影響を与えるような子どもとの関わりとしては、遊び相手や子守りよりも育児行動が望ましいことが示唆された。

一方で、パス解析の結果では、子どもとの接触経験が育児イメージや子どもイメージ、また養育性にそれほど大きな影響を与えていないというモデルが示され、むしろ養護性や親和欲求といった要因が影響を与えていることが明らかになった。子どもに積極的に関わりたいという親和欲求や、子どもに対して共感したり関心を抱いたりする共感性はまさしく母性の一種だといえるだろう。

本研究では明らかにできなかったが、子どもと関わる経験が養護性や親和欲求を高め、高められた養護性や親和欲求が子どもと関わる経験を促進するという循環性について今後さらに検討していきたい。

今回の調査では、パス解析に使用可能であったデータ数が十分でなかったことや、調査対象者が子どもに関わる仕事を目指す学生でなく、一般の女子大学生であったため、過去の子どもの接触経験が高群に分類された学生でもそれほど多くはなかったことなどの問題点が考えられる。そこで、今後、調査対象者を増や

してデータ数を確保しモデルの改良を図るとともに、子どもに関わる仕事を目指す学生のデータを収集し、接触経験が他の要因に与える影響について再度検討していく必要がある。

引用文献

- 原田正文 (2006) 子育ての変貌と次世代育成支援 名古屋大学出版会.
- 井上正明・小林利宣 (1985) 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33 (3), 253-260.
- 石松直子・江藤節代・山本捷子 (2004) 大学生の持つ育児イメージと対児感情－看護学科学生と他学科学生との比較 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report 2, 145-154.
- 小嶋秀夫 (1989) 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界, pp.187-204, 有斐閣.
- 厚生労働省 (2010) 平成 22 年度 「出生に関する統計」の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/syussyo06/syussyo2.html>
 2011/12/9 作成 2011/9/19 閲覧
- 厚生労働省 (2011) 平成 23 年版 子ども・子育て白書 (本編＜HTML 形式＞) - 内閣府
http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/html/bl_s2-1-2.html
 2011/6/17 作成 2011/9/19 閲覧
- 榎澤令子・福本 俊・岩立志津夫 (2009) 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179.
- 中川 愛・松村京子 (2010) 女子大学生における乳児へのあやし行動：乳児との接触経験による違い 発達心理学研究, 21 (2), 192-199.
- 西原由紀乃・小林康江・遠藤俊子・清水嘉子 (2008) 妊婦が抱く育児に対するイメージ－第 1 子を育児中の母親との比較から 母子衛生, 48 (4), 462-470.
- 野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子 (2007) 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 7 (1), 169-180.

- 岡田恵子（2006）医療保育科学生の実習前後の子どもイメージ、心理社会的発達の変化とこれらの関連性 川崎医療福祉学会誌, 16（2）, 377-384.
- 岡田恵子・中新美保子・谷原政江（2006）医療保育科学生と看護科学生における入学時の子どもイメージの比較 川崎医療福祉学会誌, 16（1）, 179-183.
- 大日向雅美（2000）母性愛神話の罫 日本評論社.
- 佐藤 洋美（2004）乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響 日本生活体験学習学会誌, 4, 35-54.
- 菅 眞佐子（2002）子ども観の形成に関する研究－専門教育を受けることで子どもイメージはどう変化するか－ 滋賀大学教育学部紀要 教育科学, 52, 85-94.

